

Title	共生まつりにおける共生社会実現への可能性 : 東九条マダンを事例に
Author(s)	朴, 景善
Citation	共生学ジャーナル. 4 P.124-P.151
Issue Date	2020-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/75389
DOI	10.18910/75389
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

共生まつりにおける共生社会実現への可能性

—東九条マダンを事例に—

朴 景善*

Possibilities of convivial society in the convivial festival A Case Study of Higashikujo Madang

PARK Kyongsun

論文要旨

近年、「多文化共生」や「共生」という「聞こえのいい言葉」が蔓延しているが、実際、日常生活で直面する具体的な共生の内容はまだ十分に語られていない。本稿では、「まつり」を取り上げ、まつりが共生を比較的容易にする場として働くのかを明らかにする。京都府最大の在日コリアン集住地である東九条地域で1993年から開催されている「東九条マダン」というまつりを事例に、マイノリティ側が主体的に取り組む「マジョリティとの対等な関係づくり」を通じた共生の様子を観察する。東九条マダンの事例研究を通じて、マイノリティ側が主体的に周りを巻き込む形で、共生社会に向けた社会変動を進めている様子を描き出し、共生への理解を深めるとともに、共生まつりにおける共生社会実現への可能性を探る。

キーワード：共生まつり、東九条マダン、創造的沸騰、共生社会

Abstract

In recent years, "multicultural coexistence" and "conviviality" have been widely used by the term "pretty good words". However, the contents of the specific conviviality actually faced in our everyday lives are not sufficiently verified. This study focuses on the state of making an equal relationship with the majority, which the minority actively undertakes from the viewpoint of "conviviality". In particular, this study looks up "festival" and investigates how conviviality will be embodied in the festival. This study concretely described how progressive social change towards a convivial society, with minorities actively involved in the surroundings.

Keywords: convivial festival, Higashikujo Madang, creative collective, convivial society

*大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程; park_kyongsun@yahoo.co.jp

1. はじめに

多様な背景を持つ人々が共に生きること、つまり「共生」とは、現代社会における人間の相互理解や尊重といった道徳的関係性を構築するための規範や理念として認識されている（尾添 2018）。しかし、多種多様な分野で使用されている「共生」という言葉は、その概念が厳密に定義されているとは言い難い。そのため、本稿では「共生」の概念として、河森ら（2016）による『共生学が創る世界』での定義である「民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障害等とふくむ、さまざまな違いを有する人々が、それぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い、対等な関係を築きながら、ともに生きること」（2016:4）を引用する。

共生が人間共通の理念として働く社会構築には、多様な構成員の社会参加が不可欠となる。文部科学省（2012）は、「共生社会」を「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会」とし、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である」と定義している。

また、このような社会参加を通じた共生社会実現への活動は、そこに関わる人々の自己実現の手段として作用することも可能である。竹村ら（2006:7）は「共に『生きる』には、生物学的に生きることだけでなく、むしろ生き生きと生きること」、「自己の本来の在り方を十全に発揮し得ること」、つまり「『共生』とは、『自立と連帯のなかで、誰もが十全に自己実現を果たすことが可能である社会』のこと」と述べている。ここでいう「自己実現を果たすこと」、「本来の在り方を十全に発揮し得ること」とは、内橋（2005）が共生の内容として描いたように、「自分の幸せの追求、満たされた生への努力」である。個人の有する多様な文化や属性・価値観の十分な自己表現が、人生のさらなる新たな理念や価値としての共生社会を可能にするのであろう。

本稿では、「共生」の意味や内容を考えるにあたり、あらゆる社会的制約から自由になる機会が与えられる「まつり」に着目する⁽¹⁾。近年、異文化理解や交流を目的とするまつりが全国各地で行われている。このようなまつ

りは自分が所属する文化とは異なる世界に接触することで、異文化理解力を高める経験的な空間として広げられる。本稿では事例研究として、京都府最大の在日コリアン居住地である京都市南区東九条で、毎年11月に開催される「東九条マダン」(マダン: 広場) というまつりを取り上げる。1993年の立ち上げ当時から「共生」理念を第一に、多様な人々が「共に創り上げる」ことを重視している「東九条マダン」は、在日コリアンの文化発信だけでなく、来場者に様々なマイノリティの文化について考える機会を与える空間である。

本稿は、「東九条マダン」を事例として、本まつりにおける共生理念が生まれた背景、参加者が共生を実現している様子、また共生を体験することで得られる肯定的な影響などを記述し、共生への理解を深めた上で、共生社会実現に向けたまつりの役割や可能性を探ることを目的とする。

2. 共生社会実現における「共生まつり」

異文化理解への社会的関心が高い中、日本全国では文化交流を目的とするまつりが数多く行われている。本節では、まず、このようなまつりを、その開催背景や目的などを中心に「民族まつり・多文化共生まつり・共生まつり」という3つの枠組みに分類する(朴 2019)。その中「共生まつり」に注目し、デュルケームの宗教社会学理論を参考に、まつりの場における創造的沸騰を通じた共生社会への社会変動について考察する。

2.1 異文化理解を目的とするまつり

・民族まつり

飯田は、日本社会におけるオールドカマーである在日コリアンの民族まつりの事例研究を通じて、民族まつりを「エスニック集団の固有文化を公共の場で祭りの形で表現する運動」(2007:40)として定義づけ、「自己創造と社会状況変革、すなわち自己組織化過程」として捉えた(2002:3-4)。

民族まつりの形成は、1980年代の在日コリアン社会の特徴として挙げられる⁽²⁾。その背景には、在日の社会的・経済的地位の向上や在日エスニック集団がもつ文化の成熟などがある(飯田 2002)⁽³⁾。「民族」が一番のキーワードである在日コリアンの民族まつりは、主に母国の伝統・民族文化、またアイデンティティの再確認の場として認識される。

そのため、エスニック・マイノリティ集団が主体となって開催されるまつりは、概ね民族まつりと称することが可能である。飯田は在日コリアンの民族まつりの変遷過程を追い、人権尊重や寛容といった共生理念が台頭したことを指摘しつつも、これらを「民族まつり」の一括りとして扱った。しかし、発足時の民族の主体性を重視した民族まつりは、時代の変化とともに、担い手や参加者、またその内容が多様化し、現在は異文化理解や多文化交流の場、また文化的創造の機能をもつ場として役割を広げている。特に、2010年以降、日本社会における排外主義運動の動向のなかで、「多文化共生」は重要なテーマとなった。飯田は、いかに「マイノリティの人権尊重、寛容化、共生の促進」に貢献できるのかを、民族まつりの課題として指摘している(2014:470-471)。

そこで、筆者は民族まつりの性質変容や今後の共生理念の導入への期待から民族まつりの概念をより明確に捉えたい。したがって、民族まつりをエスニック・マイノリティ集団が自主的に創造し、「アイデンティティの表現」「民族文化を継承する場」(孫 2017:57)として行ったもので、「生野民族文化祭」⁽⁴⁾のように、ホスト社会に対する民族運動の性格が強いまつりに限定して呼ぶことにしたい。それは、共生社会への実現が重要な課題である現在、民族まつりと呼べるものはほぼその姿を消したのではないかという結論にも至る。

・多文化共生まつり

近年、日本各地では「多文化共生」をスローガンに、地域社会における多文化交流の場づくりのため、様々なまつりやイベントが行われている。多文化共生を掲げる多くのまつりは、1980年代以降のニューカマーの人口増加とともに、文化交流や相互理解の場を通じて、日本人と外国人が地域社会で共に暮らせるようなまちづくり活動の一貫として開催されている。

本稿における「多文化共生」は、総務省(2006:5)の「国籍や民族などの異なる人びとが、互いの違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成要員として共に生きていくこと」という定義に従い、外国人住民の自立と社会参画を促し、日本人と外国人が地域社会で共に生活する上で必要とされる「多民族間の多文化共生」の意味に限定する。一般的に多文化共生の対象や言葉の使われ方は多様であるが、国家や自治体の政策や

報告書、取り組みなどで明確に現れるように、政治的行政的な概念での「多文化」とは、多民族の文化を指している。例えば、京都市は多文化共生の対象を外国人から様々なマイノリティの文化までに拡大して使うため、修飾語を用いて「幅広い多文化共生」(傍点筆者)(京都市 2017:16)と表現していることが、それを裏付けている。

筆者は、まつりという空間が日本人(ホスト社会)と外国人(エスニック・マイノリティ)の相互文化の理解を目的に行われる場合、それを「多文化共生まつり」と呼ぶこととしたい。小川(2014:151)は「民族まつり」の概念確定の困難さを指摘しつつも、「民族まつり」を「当該社会においてマジョリティではない特定の民族的集団の文化が主たる焦点となるようなイベント」、さらに「複数の民族的文化が同時に提示されるようなタイプのもの」までも含めて考えているとした。しかし、この定義は、英語で **ethnic festival** と呼ばれるものが前者(特定の民族的集団の文化)にあたり、**multicultural festival** は、後者(複数の民族的文化)にあたると言える。そして、近年では **multicultural festival** の呼称が増えている。筆者は前者のようなイベントが、特定の民族的集団の文化だけを強調せず、ホスト社会や異民族との関係性も重視する場合には「民族まつり」(**ethnic festival**)ではなく、「多文化共生まつり」として定義したい。したがって、後者は「複数の民族的文化が同時に」ということから、そのまま「多文化共生まつり」(**multicultural festival**)になるのである。

・共生まつり

「共生まつり」とは、本稿で引用している「共生」の概念に基づき、「さまざまな違いを有する人々が、それぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い、対等な関係を築きながら、ともに生きること」(河森ら 2016:4)の実践が見られるまつりのことを指したい。これは、エスニック・マイノリティに対する異文化理解力を高める経験的な空間である「多文化共生まつり」から拡大した次元として形成されるまつりである。それは、異民族文化の紹介や交流として始まったまつりが、民族文化に限らず「さまざまな違いを有する人々」の文化までを取り入れて開催されるようになるという変遷過程(多文化共生→共生)を経て形成された場合、だけでなく最

初から「共生」の視点で生まれたものも含まれる。さらに共生の概念を拡張し、生きている人間だけでなく、死者・自然・物質、あるいは自我をも共生すべき対象として取り入れることも可能である。本稿の調査対象である「東九条マダン」は、最初から多様な人々との共生を第一の理念とする「共生まつり」として形成されたものである。その詳細な内容は第3・4節で述べる。

2.2 共生まつりにおける創造的沸騰

デュルケームは、聖なる世界と俗なる世界を分離し、人間社会を「聖なる期間である祝祭と俗なる期間である日常生活との循環である」(野中 1997:21)と捉えた。そして、祝祭(儀礼)⁽⁵⁾の際に出現する「集合的沸騰」は、構成員に心的・物理的「融合状態」を招き、集団の連帯感や共同体意識を高める役割を持つとした。聖なる期間である祝祭の場で現れる「叫び・唄・音楽・激しい運動・踊・生命の水準を高める刺戟物の探求」(デュルケーム 1975b: 263)という「集合的沸騰」の共通感情は、俗なる期間である日常生活において、集団の一体感や統合状態を維持するものとして働く。つまり、祝祭は「何にもまして社会的集団が周期的に自己を再確認する手段」(1975b: 272)として用いられ、「集団が自己を確認し、維持」(1975b: 262)できるような機能をもつのである。

さらに、「集合的沸騰」は、共同体や連帯感を強化するといった「社会統合機能」だけでなく、社会に新たな理想や価値を生み、社会を変容させるという「社会変動機能」も有する。デュルケームによると、「集合的沸騰」は、社会の意味世界に変化をもたらし、新たな価値や秩序を形成する「革命的または創造的時代の特質」(1975a:380)をも持つ。つまり「人類の指南となる新たな法式が見出される創造的沸騰」(傍点筆者)(1975b:343)は、社会の「あらゆる断片から聖なる事物を創造」(1975a: 383)することで、日常生活における新たな価値や理念、秩序を生み出すのである。デュルケームは「集合的沸騰」の一つの特徴として「創造的沸騰」を述べ、社会変動を引き起こす儀礼(祝祭)の機能を説明している。ここで、あえて2つの概念を前項で述べたまつり分類に当てて区別するとすれば、例えば、「集合的沸騰」の機能が一番働くものは「民族まつり」であり、「創造的沸騰」が働くものは「共生まつり」であると言える。なぜなら、「民族まつり」は、聖なる物である

「民族」の発現を通じた構成員のアイデンティティの再確認や共同体の連帯感強化が目的であるに対して、「共生まつり」は、時代の新たな聖なる物として「共生理念」を表出し「人類の指南となる新たな法式」を作り上げることを可能にするからである。つまり、われわれは「創造的沸騰」という感情や現象を、共生社会実現への必要性や期待が高まる時代における共生の価値を発信するものとして取り入れることができるのである。

3. 共生まつり「東九条マダン」

3.1 東九条地域の歴史および取り組み

京都府最大の在日コリアン集住地である京都市南区東九条は、JR 京都駅八条口の南側から東にかけての徒歩圏内に位置し、交通の利便性が高い地域である。1965 年は 30,986 人が暮らしていたとされるが、2015 年の国勢調査によれば、現在の人口はその半分程度の 15,622 人 (8,514 世帯) である。

1920 年以降から多くの朝鮮人が土木建設労働者として京都市の都市計画事業を支えてきた。都市計画による交通網の整備、鴨川の護岸工事、東海道線の工事、また繊維・染色工場などで多くの朝鮮人が働いた (高野 2009)。1936 年、京都市が実施した『市内在住朝鮮出身者に関する調査』の報告書には、大正末期から朝鮮半島における生活に困窮した多くの農民労働者たちが渡航し、都市に集中して密集部落を形成したという記録が残っている (石川 2013:46)。戦後には京都駅の南側に闇市が形成されることもあり、東九条には京都市内外の各地から仕事を求めて低所得層や生活困窮者が流入し、バラック住宅や不良住宅が建つようになった。特に、鴨川と高瀬川が合流する堤防部分にバラックが建ち並ぶ不法住宅地の 40 番地 (現: 東松ノ木町) は、その劣悪な住居環境によって、外部の人からは「ゼロ番地」と呼ばれて軽蔑され、行政からはスラム地域として長い間放置されてきた⁽⁶⁾。また、東九条の北側は京都市最大の被差別部落の崇仁地区が隣接している。東九条に貧困層が流入しやすくなった要因は、被差別部落が近くにあるからだという指摘もある (宇野 2001)。被差別部落と同様、東九条もかつて「東九」の朝鮮語発音である「トンク」と呼ばれ、「地域そのものが韓国・朝鮮人に対する差別の対象」(石川 2013: 49) であった。「在日朝鮮人と被差別部落民はそれぞれ歴史的背景を異にし、権利その他の法的諸関係にも違いがある。しかし、差別の対象となり下層社会での生活を強いられてきた点では

共通性が存在する」(外村 2006: 2)。また、梁 (2014:13) は、東九条地域の課題として「差別の複合性、多重性」がよく語られるが、東九条の住民は差別とは言わなくても「在日/日本人、被差別部落にルーツをもつ/もたない、河原町通以東/河原町通以西、4ヶ町内/4ヶ町外、40番地内/40番地外、金持ち/貧乏、ニューカマー/オールドカマー、総連/民団」など、「なんとなく」存在する境界で生活していたと述べる。

このような地域に対する差別や貧困、また二項対立の境界線で苦しむ住民の問題を改善するために、1950年代から東九条ではキリスト者による児童福祉事業、大学生らによるセツルメント運動、市民団体による住環境改善運動など、様々な取り組みが展開されてきた。そして1980年代以降には、貧困・衛生・住宅問題の改善活動の他に、字の読み書きができない在日1世を対象にする識字教室「九条オモニハッキョ」(お母さん学校)や民族教育・人権問題に取り組む「希望の家児童館」による地域活動なども行われた。特に1986年、在日コリアンの文化運動団体である民族民衆文化碑「ハンマダン」(ひとつの広場)が結成され、発足当初から在日コリアンと日本人が一緒になって朝鮮半島の民俗楽器の演奏やマダン劇などを行った。そして、この「ハンマダン」の民衆文化活動が1993年の「東九条マダン」誕生につながるのである。

3.2 「いこかつくろか東九条マダン」

1993年から開催されている「東九条マダン」は、「東九条で生野の民族文化祭のようなことをやろう」(東九条マダン実行委員会 2013:28)という、在日コリアンの青年たちの熱い思いから始まった。しかし「東九条マダン」は、在日コリアンだけで行っていた生野民族文化祭とは異なり、発足当初から多くの日本人が関わりながら「共につくるまつり」として「地域」と「共生」をテーマに掲げた(片岡 2007a:70)。

「東九条マダン」は1993年から毎年11月第1週目の休日に、地域の公立学校(陶化中・陶化小・山王小・東和小)のグラウンドを輪番制で使用する形で開催されていた。しかし、2012年に上記の学校が統合され、小中一貫校凌風学園になったため、それ以来、廃校の元陶化小学校と元山王小学校の2校で開催されていた。また、2018年の「東九条マダン」は、初めて東九条地域を出て、隣町の崇仁地区にある元崇仁小学校で開催された⁽⁷⁾。そして

2019年には、再び東九条に戻り、初めて凌風学園のグラウンドで開催された。まつり開催の数ヶ月前に（例年7月、2018年には3月）結成される実行委員会は、実行委員長と事務局体制を中心に、情宣班・美術班・プンムル班・マダン劇班・出店班などのグループと有志の個人参加で運営される。

「東九条マダン」は「開かれた場」として、初期から「誰も拒まず、誰もがお客さんではなく、主人公として参加する東九条マダンのスタイル」（梁 2014:21）を築いてきた。まつりのフレーズは「いこかつくろか」、または「いこうかつくろかみんなのまつり」である。そして「東九条マダン」が目指すものは趣旨文によく現れている（東九条マダンのHP、チラシ裏面、パンフレット表紙の裏面より）。

〈趣旨〉

- ①韓国・朝鮮人、日本人をはじめあらゆる民族の人々が、共に主体的にまつりに参加し、そのことを通じて、それぞれの自己解放と真の交流の場を作っていきたいと思います。
- ②朝鮮半島にルーツをもち日本で暮らすすべての人々が、ひとつの踊りの輪に参加できるような、世代交流の場とし、そのことを通じて、子どもたちの生きた民族教育の場を作り出したいと思います。
- ③朝鮮民族の願いである南北統一に寄与するため、生活の場である地域から、和解と統一につながるマダンを作っていきたいと思います。
- ④東九条で生活するさまざまな人々が、共に生き、人と人が真に触れ合える、そのようなマダンにしたいと思います。

「東九条マダン」は、発足当時から「在日を主体とした『民族』の祭りを主軸」にしつつも、それと同時に「在日と日本人、双方が主体的に参加する祭り」（片岡 2007b:46）、さらに「被差別者を含むさまざまな地域住民の連帯」（飯田 2004:31）に重きを置きながら行われている。また、在日コリアンが中心になって形成されたまつりではあるが、排他的な姿勢を拒み、誰に対しても「開かれた場」を大事にしている。そして、初期から基本的な理念として「共生」を重視し⁽⁸⁾、人間の尊厳を表現・確認する場として続けられている。

1993年、第1回の「東九条マダン」を開催するにあたって、その準備段階の3月の事務局会議では、まつりの参加者をめぐり「障害者不在」という批判が浮上した。この批判を受け、実行委員会は8月に「障害者との交流会」を開き、障害者とのつながりを築いていった。そして、第1回から毎回「車いす体験コーナー」が設けられ、プログラムとしては「車いすパン食い競争」(第2回)、「電動車いすサッカー」(第5回)、「車いすでGO!」(第8回)、「レース『となりの車いす』」(第9回)、「座・ビーチバレー」(第10回)、「車いす劇場」(第25回)などが取り入れられた。また、第16回(2008年)からは、知的障害・ダウン症・自閉症などをもつ障害児に楽器を楽しめる機会を作ってあげたいという思いから「サムルのたまご」というプログラムを取り入れた。「東九条マダン」のホームページには「個性豊かな子供たちがサムルノリ⁹⁾を演奏する」演目として紹介されている。また、片岡(2010)の研究では、多くの参加者が「サムルのたまご」を「東九条マダン」が目指す『共生』理念を最も象徴(2010:65)する「東九条マダンらしい演目」(2010:60)として認識していることが確認される。他にも「ハンセン病問題パネル展示」「関西クィア映画祭の紹介」「東九条こども食堂の紹介」など、様々なマイノリティの存在を認知させるようなプログラムが企画されている。過去には「点字体験」コーナーや「在日無年金障害者の思い」の展示もあった。

ここで、「東九条マダン」が志向する共生へのプロセスを一番よく表現している演目として「和太鼓&サムルノリ」を紹介したい。和太鼓演奏は、第1回から取り入れられた演目だが、「和太鼓&サムルノリ」(通称ワダサム)という日本と朝鮮半島の打楽器のセッション形式の演奏は、第4回から始まり、今は「東九条マダン」の代表的な演目となっている。楽器のリズムが和太鼓は2拍子、サムルノリは3拍子で構成されるため、元々一緒に演奏することは簡単なことではないという。しかし、「朝鮮半島の打楽器の音と和太鼓の音が、ぶつかり合い、融けあい、響き合って新たな音楽世界を創りだす」という演目の紹介文からわかるように、「和太鼓&サムルノリ」は不協和音から一つの音楽を創り出し、まさに共生に向かうプロセスと実現を表現している。

4. 東九条マダンにおける共生に関する考察

4.1 研究方法

筆者は、2018年で第26回を迎える「東九条マダン」に対して、3月から12月までの期間にわたる調査を行った。調査方法は主に参与観察と参加者への半構造化インタビューである。参与観察としては、まつり開催の当日（11月3日）までの準備過程を把握するため、東九条マダンの実行委員会、プンムル班の練習、まつり当日の演目出演及びスタッフ活動、反省会などに参加した。また、東九条地域では行政や民間で共生をテーマに様々なイベントや学習会、文化活動が活発に行われていることを知り、東九条地域の全般的な状況を理解するため、なるべく各種イベントに参加するようにした。データ収集のため、東九条マダン実行委員会で発行する報告集や東九条の公式ホームページに載っている内容なども参考にして調査を行った。そして、13名の担い手や参加者にインタビュー調査を行い（表1参照）、まつり参加のきっかけ、東九条マダンへの思い、これからの課題や展望などをうかがった⁽¹⁰⁾。

表1 インタビュー対象者一覧（合計13名）

人物	区分	世代	性別	活動	出身地 ／現住地	備考
A氏	在日	40代	女性	第1回から 現実行委員長	京都市	母親は 日本人
B氏	日本	30代	男性	子供の頃から 美術班	東九条	
C氏	日本	40代	男性	第25回から マダン劇班	崇仁	
D氏	在日	30代	男性	第12回から 情宣班	大阪市 ／現京都市	
E氏	日本	20代	女性	子供の頃から 企画・統括	東九条	家族で 参加

F氏	在日	50代	男性	発足時から 元実行委員長	大阪府	帰化
G氏	日本	40代	女性	発足時から プンムル班	京都市 ／現東九条	家族で 参加
H氏	在日	40代	女性	第16回から 会計	京都府 ／現京都市	
I氏	中国	40代	女性	第21回から プンムル班	中国遼寧省 ／現東九条	
J氏	日本	70代	女性	第11回から プンムル班	京都市	
K氏	在日	70代	男性	発足時から 元実行委員長	東九条	家族で 参加、帰化
L氏	日本	20代	男性	第25回から 出店	大阪府 ／現京都市	生徒らと 参加
M氏	日本	60代	男性	第1回から プンムル班	東京都 ／現京都市	

4.2 共生創出

・「共に生きることが当たり前」の地域文化

東九条は、深刻な貧困や差別問題が語られてきた地域である。そこで、地域形成における歴史的背景による貧困・差別問題をもつ東九条では、地域が抱える課題の改善を図り、市民団体による様々な取り組みが行われてきた。石川（2013）は、東九条を「社会的排除・社会的孤立」の対象としての「複合的不利地域」であると捉え、東九条における自発的コミュニティ研究を展開した。そして、ある福祉関係者が東九条を「流れつく場所」（2013:11）だと表現したことを引用し、東九条が社会的に不利な立場に置かれ続けてきたことを述べた。しかし、地域住民のG氏が言うように「立場的に弱い人が集まってくる傾向がある町」という表現がより適切に思われる。「流れつく場所」とは、社会のどこにも属せない、社会構成員としての役割を果たせない人たちの最後の選択肢として残された場所のように聞こえる。しかし

「ホームレスの人が家を探す時に、東九条の家だったら紹介してもらいやすかった」という語りから、東九条が「いろんな人が住みやすい」「生きづらさを抱えた人が住みやすい」地域であったことがわかる。これは、社会から疎外された人たちが生活再建を図れる機会の場所としての意味合いがある。

「立場的に弱い人が集まってくる」町では、健常者であれ障害者であれ、日本人であれ在日コリアンであれ、または部落出身者であれ、日常生活から同じ地域住民としての交流を続けてきた。そして「生活困難を抱える人がともに生きられる」ように実践してきた地域の内発的かつ主体的な努力が、地域文化を創出・継承させている。東九条で生まれ育ち、現在もこの地域を中心に文化芸術活動を続けている Hamabe (2017:19-24) は、東九条で形成された地域独自の文化を「東九条文化 (Higashikujo Culture)」という言葉で説明する。「東九条文化」とは、日本文化でも在日コリアン文化でもなく、人の国籍や民族的背景、また心身の状態による判断や差別を拒み、同じ人間として共に暮らすなかで生まれた「共に生きる」文化を意味する。ある年配の住民は「昔から東九条では障害者と一緒に暮らすのが当たり前だった」と語る。また、東九条出身の B 氏は「ちっちゃい頃からそれが当たり前やったから、あまり共生とか、共に生きるとか、そういう特別な感覚はない」と語る。東九条は「立場的に弱い人」や「生活困難を抱える人」など、様々なマイノリティグループが混在して暮らす地域で、多様な人々が共に暮らしながら東九条独自の文化を培ってきた。それは「違いを認め合い、多様性を尊重し、排他性を有しない」という地域文化である。

・「創造的少数者」による文化形成

飯田 (2002:10) は「創造的少数者」という言葉を用いて、在日コリアンによる日本の文化領域での自主的で独自の役割を認めている。また、日本社会における多文化共生のためには「在日の文化創造への認識と積極的な受けとめ」が必要であると論じた上、在日コリアンの「創造的少数者」としての活躍による日本の共生社会への可能性を展望している。

東九条マダンの誕生経緯をたどると、1986年「マダン劇」の京都公演や「ハンマダン」の結成という民衆文化運動がある。マダン劇とは、1960年代後半から70年代にかけて韓国で形成された現代様式の演劇であり、また

1980年代、軍事政権下の韓国社会に対する批判的抵抗の表現手段としての民衆文化運動でもある。このようなマダン劇を京都でやろうという在日コリアン若者たちの呼びかけによって、東九条を拠点に活動する民族民衆文化碑「ハンマダン」が結成されるのである。当時、「マダン劇をやろう」という呼びかけに集まってきた若者たちの様子を、梁（2014）は次のように述べている。「マダン劇の知識はなく、芝居づくりに期待して集まった者、なんとなく巻き込まれていったものなどさまざまであった。ただ、彼らはマダン劇公演を準備する中で、『文化』という力に惹きつけられ、『文化』という武器を手にしていったようだ。」（2014:15）

東九条マダンは、韓国・朝鮮の民衆文化運動の流れを汲んでいるものの、日本人のみならず、障害者をはじめとする様々なマイノリティグループと共につくるまつりを志向している。しかし「マイノリティの文化が、圧倒的な強い文化に押されて知られていない」ことから、「マイノリティ文化を軸に発信していくというのはものすごいしんどい仕事」（東九条マダン実行委員会 2003:6-7）であった。そのため、担い手や参加者の思いや受け止め方の違いから「誰のためのまつりなのか」という主体性や立ち位置に対する批判、またまつりを実行していく上での試行錯誤はあった。ここで言えるのは、東九条マダンは多様な人々が集まり、「共生」を共通理念として行われる「みんなのまつり」だとのことである。

上記の「共に生きることが当たり前」の地域文化で述べた「違いを認め合い、多様性を尊重し、排他性を有しない」という東九条文化は、「立場的に弱い人が集まってくる傾向がある町」という地域的特性から長い期間をかけて自然に形成されたものである。その中、在日コリアンの民衆文化に魅力を感じ、その魅力を武器として新たな文化形成に挑戦した「創造的少数者」によって、地域文化と民衆文化が融合した形で、共生まつり「東九条マダン」は誕生したのである。

4.3 共生実践

・「自己解放」を通じた共につくるまつり

青木（2001:82）は、まつりの場において、日常生活の規範や秩序は解除され、人間の社会的地位や役割分担が転換されるとした。これは、現実には貧富や階級の差が存在するとしても、まつりの場においての人間は、ありのまま

の人間として自由になれるとのことである。人間として自由になることは、「抑圧や差別、支配や攻撃、侵食や侵害、不公平・不平等が存在しない」（竹村・松尾 2006:7）状態であり、人間が「自己の本来の在り方」を表現・実現できるということである。竹村・松尾（2006:7）は、このように「誰もが十全に自己実現を果たすことが可能となっている状態を実現してこそ、はじめて『共に生きる』」という「共生」について語れるのではないかと主張する。次に東九条マダンの趣旨文の①をもう一度確認する。

韓国・朝鮮人、日本人をはじめあらゆる民族の人々が、共に主体的にまつりに参加し、そのことを通じて、それぞれの自己解放と真の交流の場を作っていきたいと思います。

東九条マダンは「あらゆる民族の人々」が共にまつりをつくり、参加する作業を通して、「それぞれの自己解放」の場として機能することを目指している。この趣旨文には「いろんな立場の人が対等な立場で共に参加し、共同作業を通して何か次のものに飛躍し、そこから何か新しいものが生まれる」（東九条マダン実行委員会 2013:29）ものとしての意味が付与されている。また、これは在日コリアンをはじめとするあらゆるエスニック・マイノリティ側が、マジョリティ側の日本人と対等な関係になれる一番早い方法が「自己解放」であることを示している。また、「隣に住んでる在日が解放されていないってことは、その横にいる日本人であるあなたたちも一緒でしょう」という A 氏の語りのように、片側だけの解放は考えられないのである。日本人と在日コリアン、マジョリティとマイノリティの関係における「抑圧するかしないか、意識はなくても、そういう二項対立的なものを取り払おう」（A 氏）という意味で、東九条マダンの「自己解放」の状態は重要な意味をもつ。

東九条で生まれ、韓国・朝鮮文化を自分の文化として認識して育った日本人の E 氏は東九条マダンの真の解放の場であると語る。彼女は自身が日本人である事実に対し、「自分のナショナルリティとアイデンティティの不一致」からくる「乖離される苦しみ」があったと語る。特に、小学校3年生の時、自分が日本人であることから民族学級に入れないことを知らされ、涙を流しながら家に帰って来たという。排除しないという東九条文化の中で育っ

た彼女が、初めて経験した排除された苦しみを、彼女は「文化的トラウマ」だと表現した。彼女は、この「文化的トラウマ」やナショナリティとアイデンティティの乖離からの苦しみを解放してくれる場所が東九条マダンだと語った。

ほんとに解放される場であると思うから、自分は「和太鼓&サムルノリ」で日本の和太鼓と朝鮮のサムルノリと一緒にやって、ただの一緒にやってるだけでなく、一緒に音楽的に、合体させてやってるわけですけど、私はそれを聞いている時にサムルノリ側として聞いている、でも、国籍、民族的に言うと和太鼓側の人間、だけど、日本人であること、加害国の人間であること、自分のルーツがそっち側とか考えることがすごく辛かった時に、朝鮮の楽器と音楽として溶け合ってる和太鼓の姿をみて、自分もこの場所でなんとかやっていると勇気もらったし、だから、そういうふうにいるんな人が、国籍がなんであれ、民族がなんであれ、自分の性とかがなんであれ、なんでもいいやんていうのが、自分でいいやんみたいなことを思える場所になった。

(2018年10月1日インタビューより)

趣旨文の①では「あらゆる民族」に対して「自己解放と真の交流の場を作っていきたい」と記されているが、実際は、民族に限らず、あらゆる人に対して「自分でいい」と思えるような自己解放の場を目指している。このように「ありのままの自分になれる」自己解放という手段によって、人間をマジョリティやマイノリティという二項対立的なものに区別することは無駄になり、マジョリティ／マイノリティという言葉の意味は喪失するのである。

・「広場型」コミュニティ

東九条マダンは、東九条地域に根ざした形で開催されているが、その担い手や参加者の多くは地域外部から来ており、国籍・民族・性別・世代・障害有無・教育水準・社会階層といった区別において幅広い多様性が見られる。このコミュニティを結束する一つの範疇として説明できるものは見つからず、共通の性質と言えるのは、ただ「東九条マダンというまつりのために集まった」とのことである。

バウマン (2008:17-18) は、「コミュニティ」を「すべてのメンバーが一つの理解を共有している」ことであると述べた。また、ここでいうメンバーに共有された「理解」とは「異なった意見をもつ人々が合意に達したもの」としてのただの「コンセンサス」ではなく、口論・反対・なぐり合いなどの過程を経た「厳しい交渉と妥協の産物」としての理解であることを強調した。東九条マダンの発足初期に「東九条でまつりをやろう」という共通の目標を立てたものの、準備過程において「なぜ日本人と一緒にやるのか」「なんで日本人がチャンゴを叩くのか」「障害者をどこまで受け入れているのか」「障害者と健全者の感じ方やペースが違う」といった問題から生じる反発や衝突があった。

このような困難を乗り越えた「厳しい交渉と妥協の産物」として存在する現在の東九条マダンは「来る者を拒まない、去る者を追わない」という姿勢が強く、コミュニティの特徴として「自由を大切にする」「居る人でやる」「敷居がない」という点が見られた。

自由を大事にする場、そのまま姿消す人も、それでもいいという雰囲気があるから、気楽に行きたい時に行って、なんか、行きたくなければ、行かなくていいですし。(H氏)

東九条マダンは日本人とか、なに人とかあまり関係なく、おる人でやる。(D氏)

ふらっと来る感じかな、子供なんか特にそう、やっぱり、思春期とかは近寄りもしないけど、大人になってまた遊びに来たり、手伝ったり、すごいなあって思う。敷居がない。(A氏)

本稿では、このように誰に対しても開かれたコミュニティを「広場型」コミュニティと呼ぶこととしたい。これは、人の背景や属性が問われることなく、広場のように誰に対してもいつでも開かれた公共空間である。言い換えれば、「一つの理解」の共有のもとで、自主的に参加し、その場にとどまるか、去ってゆくか、あるいは戻ってくるかを自分で決めるコミュニティのことを意味する。このようなコミュニティの長所は、「敷居がない」ことから、

「普通なら出会えない人達とつながりをもてる」(B氏) ことである。例えば「障害をもつ人と関わる場が全くなかった」人が、東九条マダンの参加を通じて、障害者と交流し、障害者の気持ちや立場をより理解できるようになる。あるいは同じく差別を受ける側である在日コリアンが「障害者のような別のマイノリティの存在」を認識するようになる。

安達(2013:11)は『『コミュニティ』とは、…(中略)…世界の意味を開示し、行動のための準則を与える『文化』および『価値』の源泉を提供する社会空間である』と述べた。東九条マダンには、様々な立場の人々を受け入れ、交流を通して物事に対する自身の認識世界を広げ、生活における新たな意味や価値の発見を助けるコミュニティとしての役割がある。その中で、一番大事にされている「文化」および「価値」というのは、やはり「共生」である。

・楽しさの共有が生み出す「つながり」

まつり参加者にとって「楽しさ」というのは、まつりの参加動機や継続理由において重要な要因となる。筆者が実施したインタビューや聞き取り調査においても、多くの参加者が東九条マダンの一番の魅力として「楽しさ」を取り上げた。まつりにおける楽しさや興奮は、「それが終われば霧のように消えてしまう」(飯田 2002:328)と、ただ1日だけの感情として捉われがちである。しかし、参加者にとっては「つくる過程も片付けもすべてひくくめてまつり」(東九条マダン実行委員会 2013:37)になるのである。

楽しさの要因を次の2つに分けて紹介したい。まず、様々な人が集まり、共にまつりをつくっていく過程における楽しさがある。美術班に所属するB氏は、東九条マダンが「いこうかつくろうかみんなのまつり」であることを繰り返し強調した。そして「いろいろな人がかかわってるから、温度差、ペースの差が生まれる」ことはあるが、「マダンに出たら本当にいろいろな人に出会えるし、いろいろなことも起こるし、退屈しないから、そこが面白いところ」だと語った。また、プンムル班所属の中国出身I氏は、まつり当日に参加することが楽しいというよりも、チャンゴの練習に行くこと自体が楽しいという。その理由は「チャンゴ叩きに練習に行って、人に会って、ご飯食べて帰ってくる」という人との付き合いがあるからである。そして「一緒に

やると、化学的な効果が出て、単純にチャンゴを叩くだけでは味わえない楽しさがある」と語った。

次に、まつりにおける「文化という武器」のもつ魅力による楽しさがある。I氏は「朝鮮半島の文化芸術は、私の中では、他の国のものより本当に面白い、芸術として面白い」という。I氏が東九条マダンに参加するようになった最初のきっかけというのも、「マダン劇の日本ツアーを観て、その音楽にすごく感動した」からである。現在、プンムル班の練習において、在日より日本人の方が多く参加していることは「日本人にマダンの魅力、朝鮮半島の音楽の魅力を知ってもらった一種の成功とも言える」と語った。また、和太鼓の演奏者として第1回東九条マダンに参加し、現在はプンムル班でチャンゴを叩くM氏は、なぜチャンゴを習いたいと思ったのかという質問に次のように答えてくれた。「プンムル隊の演奏を観て、とても素晴らしくて感動した。和太鼓にはないリズムとか、ハーモニーとか、素晴らしいものがあると思って、やってみたいなと思った。」このような文化芸術には、国籍や民族、さらに心身の状態を超えて人をつなぐ魅力や楽しさがある。元実行委員長で在日3世のF氏は、聴覚障害者団体でサムルノリを演奏した時の事を語ってくれた。

聴覚障害者団体に呼ばれて、でも、あの人ら、聴覚障害で聞こえないんですよ、でも、胸に響きますって、その言葉が感動で、音は聞こえないけど、太鼓とかの振動で響くんですよ、胸に、って聞かされた時に、すごく感動した。

(2018年10月5日インタビューより)

まつり当日において、文化芸術の魅力や楽しさに惹かれて多くの来場者が訪れる。そして、誰かに「マダン同窓会」となり、「年に一度落ち合う場」(東九条マダン実行委員会 2013: 37)となり、なつかしい顔に会える機会として人のつながりを維持してくれる場となる。また「毎回、楽しいから来てる」という来場者を対象に、参加者たちは、準備・練習してきたものを多くの人前で披露し、「一緒に楽しみましょう」とその場を盛り上げる。筆者は、まつり開催の2ヶ月前から大人プンムル班に所属して週1回のペースで6回の練習に参加した。また、まつり開催の一週間前には子供プンム

ル班とプンムル演奏の構成を合わせる総合練習を行った。総合練習が終わった後、プンムル班のチーフは、「今まで頑張りました。当日、間違ってもいいです。笑顔で楽しみましょう！」という言葉だけをみんなに投げかけた。東九条マダンには、芸術的な専門性や完璧な演出を求めず、単に「みんなでまつりを楽しむ」ことを重視している。

このように、東九条マダンの準備段階から開催までの過程において、いろいろな人との出会い、付き合いを通じた「人とつながる楽しさ」が存在する。そして、文化芸術を通じた「楽しさを共有することで生まれるつながり」がある。このような「楽しさ」と「つながり」の相互循環的な作用の中で、さらなる楽しさやつながりが生まれ、また強化される。

4.4 共生体験から得られるもの

・意識変容や人間尊厳への学び

意識変容とは、「新しい知識を獲得し、自分の現在の前提、価値観、そしてパースペクティブを問い直す」（池田・朱 2007:105）ことである。東九条マダンは、国籍・職業・年齢など、様々な人が集まるため、普段の生活では交流のなかった人と接する機会を提供する場である。東九条マダンにおいては「普通なら出会えない人達とのつながり」（B氏）を通じて、世の中には自分とは異なる多様な人が「当たり前にあるということが知れた」（L氏）という意識変容が起こる。

例えば、障害者との交流において「車椅子の人と全然喋ったことがなかった」人が、東九条マダンをきっかけに「障害者の思いを知る」ことや社会には「いろんな立場の人がいる」ということを改めて認識するようになる。ある在日3世が語るように「在日として生きてきて、マイノリティの立場を自覚はしてはたけども、障害者のような別のマイノリティの存在を見てこなかった」（東九条マダン実行委員会 2003:32）ことからの意識変容が起こる。D氏は次のように語った。

あの、（障害者が）全然いなかったかって言ったら、いたんですよ、きつとね、やっぱり、ちゃんと認識してなかっただけで、...（中略）...けど、あんまり、なんか自分が関わる相手だと思っていなかったみたいな、そういうふう生き

てきたんで、たぶんマダンにかかわってなかったら、今でもそれ以外にほとんどかかわることはないだろうなっていう気はしますね。... (中略) ... 自分が育ってきた環境のなかで、見たことのあるはずだけど、あんまり重要だと思ってなかったことっていうのを、改めてちゃんと、見直せるようになった場所だなんて思います。
(2018年9月26日インタビューより)

また、東九条マダンは、参加する子どもにとって、異なる社会的背景や身体的条件をもつ多様な人とのかかわりやつながりを経験できる学びの場でもある。その中から、「共生」の意味を肌で感じとることは、子どもにとって貴重な体験となり、一人一人の人間が尊厳を持っていることを自然に覚えていく。G氏は東九条マダンへの参加が娘の成長や将来にどのような意味をもつのか、次のように語ってくれた。

いろんな人が集まっている環境に、自分がいた、たとえば、朝鮮半島の楽器を叩いた、障害のある人たちの作業の綿菓子を食べた、車椅子の人たちがいた、フィリピン人が歌を歌ってた、なんか、そういうところに自分がいたという経験が、それ自体が大きいと思う。
(2018年10月12日インタビューより)

第1回東九条マダンが開催された1993年生まれで、「東九条マダンと同じ歳です」と自分を紹介するE氏は、東九条マダンが彼女の成長や人生観に大きな影響を与えたと語った。特に、東九条で生まれ育った彼女は「日本にあるコリアンコミュニティの中で育った日本人」として、色々混乱はあったものの、「多民族、多文化、人がありのまま生きること、アイデンティティ」について考える機会が多くなり、「共生が自分の得意分野」になったと語る。

東九条マダンらしい共生のあり方みたいなのが絶対にあって、趣旨文にもあるけど、民族とか国籍とか、心身のいろんなありようとか、そういうのから解放されて、共に生きる場、一緒にいることを喜ぶ場みたいな趣旨が東九条マダンにはあるから、なんか、まんまとそういう人間にされたというか、... (中略)

... 東九条マダンが出来てからの文化の中に自分はいるから、本当にそういうのが当たり前な人間に自分はなっただことがわかります。

(2018年10月1日インタビューより)

現在、フリースクールの教員のL氏は、2017年に続き、2018年の東九条マダンで生徒らと一緒に「たこせん」の出店を出した。東九条マダンの参加が生徒らにとって、どのような意味があったかという質問に対して、「すごい楽しい」ことで、「いろんな人が自分の身の周りにいることを肌で感じる事ができた」という意見が多く聞こえたという。また、生徒らが「自分を表現したり、誰かと関わったりする機会」になったことが大変良い点だと語った。このように、「普通なら出会えない人達」とつながる体験は、他者の立場をより深く理解することを可能にする。これは様々な人と「共に居ること自体」の共生体験がもたらす肯定的な影響であろう。

5. おわりに

本稿では、新たな価値や理念を生み出す創造的沸騰を通じた「まつり」における共生社会に向けた取り組みや実践を、「東九条マダン」の事例を用いて描き出した。事例研究では、マイノリティ側が自主的に周りを巻き込む形で共生に取り組む様子が観察できた。まず、共生理念を生み出した背景として、東九条が歴史的に「社会的排除・社会的孤立」(石川 2013)の対象として差別されてきた地域であり、その中「立場的に弱い人が集まってくる傾向がある町」として、様々な立場の人が「共に生きることが当たり前」という地域文化が形成されたことが上げられる。そして、在日コリアンをはじめとする被差別者たちやまつりの共生理念に共感した人たちが「創造的少数者」(飯田 2002:10)として文化芸術活動を展開し、文化表現を通じて共生を実践していることがわかった。共生を実践する具体的な手法は、まつりの場における「文化という武器を用いた楽しさの共有」と「自己解放を通じた対等な関係づくり」である。これによって、マジョリティとマイノリティという区別、または個人を決めつける属性は消滅し、共生が実現されるのである。さらに、まつりの参加を通じた共生体験は、「普通なら出会えない人達とつながり」を作り、ポジティブな方向へと意識の拡大や変容を引き起こす。ま

た、人間尊厳への学びや豊かな人間性の育成にも役立ち、「異なる存在を認める度量や受容的態度」(金 2009)を育むことができる。

したがって、マイノリティ側が主体的に取り組んでいる文化芸術活動を通じた共生への実践や共生体験がもたらすポジティブな側面に注目する作業を通じて、われわれは、共生まつりにおける共生社会実現への可能性を見出すことができた。東九条マダンの事例研究を通じて、ただの「心地よい響きをもつスローガンや修飾語」(村井 2003:1)として捉えられてきた「共生」は、徐々に形あるものとして、より明確に語れるようになったであろう。

しかし、『共生』という言葉が醸し出す心地いい調和的な響き」(岩濑 2010:15-16)によって、東九条マダンにおける分厚い歴史や生存のため戦い続けてきた人々の人生が忘れられてはいけない。東九条マダンが共生を語れるような場所になったのは、「血の出るような努力の繰り返し」(京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 2018:5)があったからである⁽¹¹⁾。まつりの楽しさを強調するあまり、マイノリティ側の葛藤や生きづらさの実体が埋もれてしまうことには注意を払うべきであろう。共生をめぐるコンフリクトや負の側面についての研究は今後の課題にしたい。

注

- (1) 青木 (2001:82) は、「祝祭という時間においては、日常の秩序を一旦停止して、無秩序が出現し、役割分担が転換して、今までの地位を反転するというのもその中で起こり... (中略) ... 貧富の差とか、階級の差が現実にはあっても、祭の時は一時的にそれがはずされて、人間として自由になって、予期せぬことが起こる。」と述べている。このように「まつり」は、社会的制約から自由になれる場としての機能を持っている。
- (2) 1980年代の在日コリアン社会における代表的な3つの民族まつりは、「生野民族文化祭」、「ワンコリア・フェスティバル」、「四天王寺ワッソ」がある(飯田 2002; 2006 など)。これらのまつりの特質は、「①共通のテーマとして『民族』を挙げている点、②特定の宗教的伝統をもたない点、③少数の個人やグループの発意によって始められ、④ボランティアによる大きな広がりを獲得し、⑤今日も流動の過程にある」点である(飯田 2004:27; 2006:45)。
- (3) 歴史的背景としては、「①高度経済成長期における在日の生活基盤の確立と世代交代、②1970年代指紋押捺撤廃運動など反差別人権運動、③朝鮮半島・在日社会の南北の緊張」がある。文化的背景としては、「①韓国における『民族文化』の政府・反政府側の争奪と在日『民族文化』への取り入れ、②70年代在日学生運動の文化的転換、③民族学校・公立校での民族教室、④日朝の古代史学・渡来人史研究の進展」がある(飯田 2014:470-471)。

- (4) 1983年に始った「生野民族文化祭」は、「ひとつになって育てよう民族の文化を!こころを!」というスローガンを掲げ、在日コリアン若者の民族的アイデンティティの確立や民族的連帯感の形成を目的とした(金子 2015:11)。また、「日本社会の厳しい差別と抑圧によって奪われてきた民族性、人間性を回復していくための心からの闘い」(金 1985)として始まったまつりであり、「在日コリアンの日本社会における尊厳と権利の獲得」(吉田 2008:83)をまつり開催の意義としていた。そのため、出演者は在日コリアンのみで、日本人は裏方としてしか参加することができなかった。そして「続けていくことに疲れた」「すでに意義を果たした」(飯田 2004:31)などを理由に、2002年第20回で終わりを迎える。
- (5) 「祭り(まつり)」に関する用語は、「祭礼、儀礼、祝祭、イベント、フェスティバル」など、その捉え方は多様で定義することは困難である。例えば、柳田(2013:96)は、宗教儀式として厳粛で崇高な雰囲気で行われるものを「祭り」、路上で多くの観衆に囲まれて行われる華やかでお祭騒ぎのようなものを「祭礼」と定義する。また、藪田(1990:64)は「祭り」を「祭儀」と「祝祭」に分け、厳粛な神事や儀式を意味する「祭儀」は「儀礼」と同義語として ritual、「祝祭」は festivity (festival) であるとした。そして、芦田(2001:29)は行政や商業団体が「地域意識の高揚や経済の活性化を目的」と掲げて開催する祭りを「イベント」として位置づけている。しかし、本稿での「まつり」は上記の詳細な枠組みに従わず、ただ集合的沸騰を表出する点において、デュルケームのいう儀礼・祝祭などと共通していることに注目して述べていることを断っておきたい。
- (6) 40番地は、京都市が1967年に立てた「京都市スラム対策基本計画」があったにもかかわらず、住宅建設基礎工事が開始されたのが1995年、住環境整備事業は完了したのは2011年のことである。
- (7) 2023年、京都市立芸術大学が元崇仁小学校を含む敷地に移転する。そのため、2019年から工事が始まる元崇仁小学校を「東九条マダン」が見送るという意味合いで、2018年の開催は東九条地域ではなく崇仁地区で開催された。
- (8) 東九条マダン立ち上げの当時、長田マダン(現:統一マダン神戸)を立ち上げた中心人物のある在日青年は「自分たちは奪われた文化を取り戻そうとし、つくっていかうとしているのに、日本人と一緒にやるのはちょっと違うんちゃうか」と批判した(東九条マダン実行委員会 2013:29)。そして「自分らの奪われてきた言葉・歴史・文化は、奪われてきた自分らにしか表現することができない、日本人にはわからない」という批判に対して、K氏は「東九条には東九条のやり方がある」と答えたという。
- (9) サムルは「四物」で、ノリは「遊び」という意味で、サムルノリは、朝鮮半島の伝統楽器であるケンガリ・チン・チャンゴ・ブクの4つの打楽器を使用し、1970年代末に金徳洙(キム・ドクス)によって演奏され始めた現代音楽である。サムルノリは、農民たちの音楽や踊りで、農楽(ノンアク)とも呼ばれるブンムル(風物)という伝統芸能をアレンジして作られた。
- (10) 本調査は、東九条マダンの担い手や参加者を中心に行ったため、まつり当日の来場者の視点が不十分であることは否めない。したがって、本稿が明らかに

しようとする「共生まつり」で得られる共生社会実現に向けたポジティブな影響は、まつりに長期的に関わり、まつりを創り上げる主体者や参加者たちの経験に焦点を当てたものである。

デュルケームは「ひとたび儀礼上の義務を果すと、われわれは旧倍の勇気と熱意をもって俗生活に立ち帰るのである」(1975b:262)と述べている。そして、このような聖なる世界の経験は日常生活に戻ることによってその効果が薄れるため、定期的に行われるのである。したがって、まつり当日の来場者にとっても、共生まつりの場における共生体験は意味をもつであろう。来場者の視点をも考慮した調査は今後の課題にしたい。

- (11) 東九条に位置する「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン」のセンター長は、「共生」について「現実の中で、生活の中でそれを実現していくことは、生やさしいことではなく、血の出るような努力の繰り返し」(京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 2018:5)だと語る。また、東九条マダンの実行委員長は「人が生きていく、一人では生きていけない、共に生きる共生、その言葉を実現するには、相当努力が要る」と語る。このように、共生社会は簡単に実現できるものではない。したがって、われわれは日々の努力を続けていく必要がある。



写真1 ポスター



写真2 大サムルノリ



写真3 和太鼓&サムルノリ



写真4 ティプリ（閉会式）

参考文献

青木 保 2001『異文化理解』岩波新書。

芦田 徹郎 2001『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社。

安達 智史 2013『リベラル・ナショナリズムと多文化主義—イギリスの社会統合とムスリム』勁草書房。

飯田 剛史 2002『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』世界思想社。

————— 2004「在日コリアンの『祭り』形成と公共化」京都大学大学院文学研究科『人文知の新たな総合に向けて：21世紀 COE プログラム—グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』第2回報告書 3:25–37。

————— 2006「在日コリアンと大阪文化—民族祭りの展開—」『フォーラム現代社会学』5:43–56。

————— 2007「日本における多文化共生のゆくえ—民族祭りの視点から—」芦名定道編著『多元的世界における寛容と公共性—東アジアの視点から』晃洋書房 pp.39-48。

————— 2014「民族まつりの展開と課題」『宗教研究』87別冊:470–471。

池田 広子・朱 桂榮 2007「批判的ふり返りによる教師の能力開発の試み—意識変容の学習理論の観点から—」『言語文化と日本語教育』3:105–108。

石川 久仁子 2013「『複合的不利地域』におけるコミュニティ実践に関する研究—京都・東九条を中心に—」関西学院大学大学院人間福祉研究科博士論文。

岩淵 功一編著 2010『多文化社会の〈文化〉を問う—共生 / コミュニティ / メディア』青弓社。

宇野 豊 2001 「京都東九条における朝鮮人の集住過程（一）」『研究紀要』6:43-80。

内橋 克人 2005 『「共生経済」が始まる—競争原理を超えて（NHK 人間講座）』
NHK 出版。

小川 伸彦 2014 「民族まつりコンテンツの内容分析—京都・東九条マダンポスター
図像の21年—」研究成果報告書『民族まつりの創造と展開』（上）論考編第6
章 pp.133-153。

尾添 侑太 2018 「後期近代における『共同性』を再考する：『共生』/『共在』の
比較を手がかりに」『関西学院大学社会学部紀要』128:115-130。

片岡 千代子 2007a 「在日コリアンの祭りにおける多文化共生空間の創成—京都『東
九条マダン』の楽器隊を事例に」『名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進
室年報』1:70-80。

————— 2007b 「民族祭りにおける『地域』という戦略—『第8回東九条マダ
ン』を事例に—」『名古屋大学大学院文学研究科比較人文学年報』5:43-58。

————— 2010 「『東九条マダン』という民族祭りにおける『共生』理念の再解釈
—カテゴリー的『共生』から/と『楽しみ』の共有—」名古屋大学大学院文学
研究科文化人類学研究室比較人文学年報 7:53-66。

金子 真紀 2015 「在日コリアンの民族文化運動—80年代に起こった『生野民族文化
祭』を中心に—」『社会教育研究紀要』1:11-22。

河森 正人・栗本 英世・志水 宏吉編集 2016 『共生学が創る世界』大阪大学出版
会。

金 泰明 2009 「リベラル共生論の原理的研究—井上達夫の『コンヴィヴィアリティ
ィ』論の批判的考察」『アジア太平洋レビュー』6:43-62。

金 徳煥 1985 「民族のマダン（広場）—生野民族文化祭」『月刊社会教育』29(8):29-
34。

京都市 2017 『京都駅東南部エリア活性化方針』。

京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 2018 『京都市地域・多文化交流ネッ
トワークサロン通信第25号』。

総務省 2006 『多文化共生の推進に関する研究会報告書—地域における多文化共生
推進プランについて—』。

孫 ミギョン 2017 「在日コリアンにおける文化運動としてのワンコリアフェスティ
バルの意義」『空間・社会・地理思想』20:57-71。

藪田 稔 1990 『祭りの現象学』弘文堂。

高野 昭雄 2009 『近代都市の形成と在日朝鮮人』 人文書院。

竹村 牧男・松尾 友矩編 2006 『共生のかたち—「共生学」の構築をめざして』 誠信書房。

デュルケーム、エミール 1975a 『宗教生活の原初形態』 (上) 古野清人訳、岩波文庫。

————— 1975b 『宗教生活の原初形態』 (下) 古野清人訳、岩波文庫。

外村 大 2006 「帝都東京の在日朝鮮人と被差別部落民」 『部落解放研究』 171:2-17。

野中 亮 1997 『宗教生活の原初形態』における「俗」の位置—デュルケーム宗教社会学の動学化のために— 『ソシオロジー』 41(3):19-35。

バウマン、ジグムント 2008 『コミュニティ安全と自由の戦場』 奥井智之訳、筑摩書房。

朴 景善 2019 『在日コリアンの地域まつりにおける共生学的研究—「東九条マダン」を事例に一』 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文。

東九条マダンホームページ <http://www.h-madang.com/> (2019/10/31 アクセス)

東九条マダン実行委員会 2003 『東九条マダン 10年のあゆみと第10回東九条マダン報告集』。

————— 2013 『第20回東九条マダン報告集—第20回記念座談会／開催データでみる東九条マダンの20年』。

村井 忠政 2003 「共生をめぐる若干の疑問—共生概念の再検討の試み」 『名古屋多文化共生研究年報』 1:1-12。

文部科学省 2012 『共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進』 平成24年版。

柳田 国男 2013 『日本の祭』 角川ソフィア文庫。

梁 説 2014 「京都市東九条地域に見る民衆文化のダイナミズム—東九条マダンからの『マダン劇』再考—」 『公益財団法人大学コンソーシアム京都 都市政策研究助成研究報告論文集』 pp.5-54。

吉田 正純 2008 「多文化共生と『ローカル・ノレッジ』—京都における在日コリアン地域活動を事例に一」 日本社会教育学会年報編集委員会編 『〈ローカルな知〉の可能性—もうひとつの生涯学習を求めて—』 pp.79-91、東洋館出版社。

Hamabe, Fu. 2017. *The Day We Became Japanese: Effects of Minzoku Class on Japanese Children*. Masters of Arts in International Studies (East Asian Region) Graduate School of International Studies Korea University.